

3 高校中退者の進路分岐について——模索と不安定さの両義性

法政大学社会学部准教授 樋口明彦

はじめに

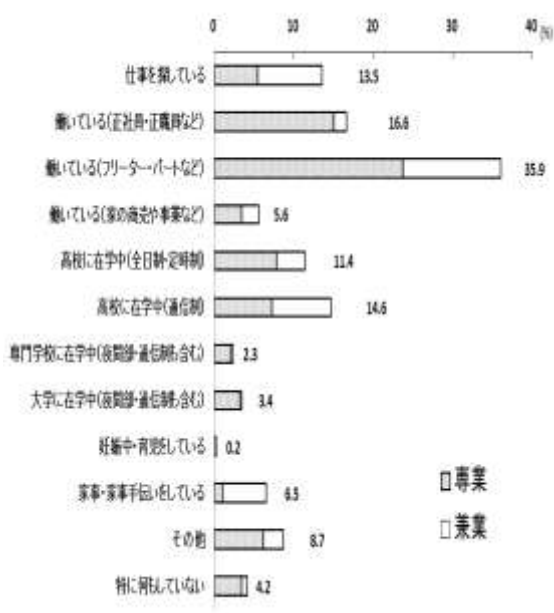
本論では、平成22年7～9月に実施された内閣府「若者の意識に関する調査」から、高校中退者の進路選択プロセスと、それに伴う社会的リスクの諸相を検討することにした。

1. 高校中退者の複雑な現状

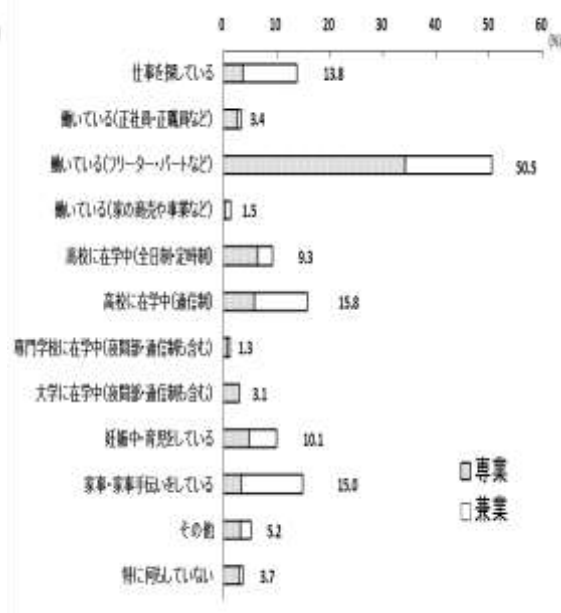
(1) 現在の活動内容

まず、高校中退者が現在している活動について整理してみると（図表1及び図表2）、その状況は極めて複雑で、決して一様ではないことがわかる。

図表1 男性における現在の活動 (N=554)



図表2 女性における現在の活動 (N=614)



第一に、進路傾向は性別によって大きく異なる。「働いている（正社員・正職員など）」の割合は、男性 16.6%、女性 3.4%と男性が多くなっている一方、逆に女性が多い活動として、「働いている（フリーター・パートなど）」の男性 35.9%、女性 50.5%、「妊娠中・育児をしている」の男性 0.2%、女性 10.1%、「家事・家事手伝いをしている」の男性 6.5%、女性 15.0%を挙げることができる。確かに、数そのものが多いとは言えないが、正規雇用の割合は女性よりも男性のほうが相対的に高く、その代わりに女性は非正規雇用や家事労働に従事する割合が高まるのがわかる。

第二に、高校中退者では、一つの活動に従事する「専業」だけではなく、同時に複

数の活動を行う「兼業」も少なくない。男女とも、求職者、非正規雇用従事者、通信制高校在学者、家事従事者の場合、「兼業」の割合が高い。とりわけ、通信制高校在学者のうちの38.3%、家事従業者のうちの27.9%は、同時に非正規雇用として働いていることから、その選択肢には進路における試行錯誤という意味も多分に含まれていると推測できよう。

(2) 現在の活動をしている背景

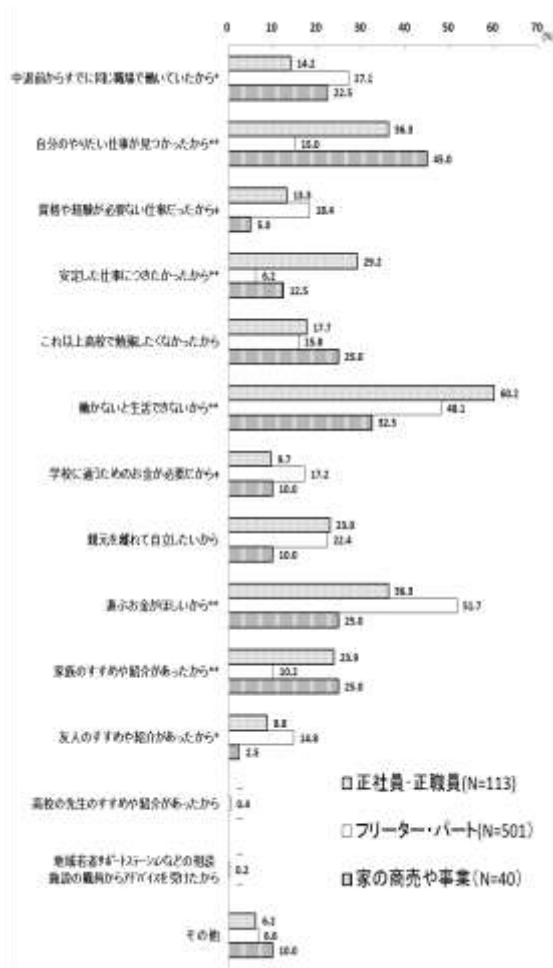
では、このような進路分岐の背景には、どのような要因があるのだろうか。「正社員・正職員」「フリーター」「家の商売や事業」の就業形態別に仕事をしている理由を見ると、次の項目において有意差が見られた(図表3)。とりわけ「正社員・正職員」において割合が高い理由として、「安定した仕事につきたかったから」「働かないと生活できないから」が挙げられ、「自分のやりたい仕事が見つかったから」「家族のすすめや紹介があったから」は「正社員・正職員」と「家の商売や事業」の両者において割合が高くなっている。反対に「フリーター」において割合が高い理由が、「遊ぶお金がほしいから」「友人のすすめや紹介があったから」「中退前からすでに同じ職場で働いていたから」「資格や経験が必要ない仕事だったから」「学校に通うためのお金が必要だから」となっている。「働かないと生活できないから」という項目では、「正社員・正職員」とともに「フリーター」においても該当する者の割合が相対的に高くなっている。

総じて見ると、「正社員・正職員」は自分の志望・仕事の安定性・生活上の必要性・家族の勧めなどの積極的な理由によって選ばれ、結果的に長期的な展望のなかに位置付いているが、「フリーター」は遊ぶお金の必要性・同じ仕事の継続・友人の勧めなどの消極的な理由か、あるいは通学費用・生活上の必要性という差し迫った理由に基づき、共に短期的な展望のなかで選択されている傾向が強いといえよう。また、「全日制・定時制高校」「通信制高校」「専門学校」「大学」と在籍する教育機関別に学校に行く理由を尋ねてみると、そこにも進路ごとの背景要因が浮かび上がる(図表4)。「全日制・定時制高校」「通信制高校」に在学する者が多く挙げる理由は、「高卒の学歴がほしいから」で、その割合はほぼ9割に達する。対照的に、「専門学校」や「大学」に在籍する者は、「自分の勉強したいことが見つかったから」「就職に役立つ資格を取りたいから」「現在又は将来の仕事に必要だから」を選ぶ割合が相対的に高い。さらに「大学」においてのみ、「まだ働きたくないから」と回答する者が多くなっている。

このように、「専門学校」「大学」の場合、自分の志望や将来の仕事などこれからの進路を視野に入れた長期的な展望に依拠して選ばれていることが多いが、反対に「全

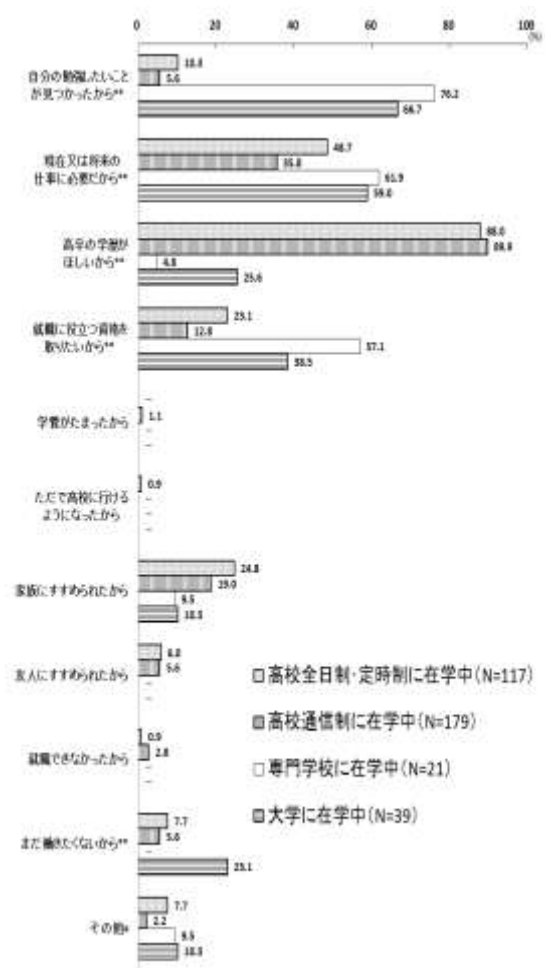
日制・定時制高校」「通信制高校」の場合、どちらかといえば高卒資格そのものに価値を見出す傾向が強いといえよう。特に「通信制高校」は、「全日制・定時制高校」よりも将来の仕事や資格に対する意味付けが少し低くなっている点に留意すべきだろう。

図表3 仕事をしている理由



+<0.1, *<0.05, **<0.01

図表4 在学している理由



+<0.1, *<0.05, **<0.01

2. 進路選択のプロセス

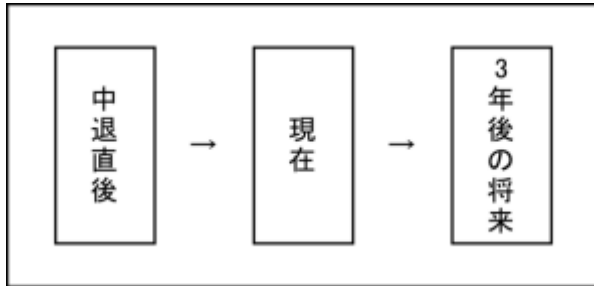
(1) 分析枠組み

前述したように、高校中退者の現在の進路は、就労・在学・その他の活動に大きく分かれ、そのなかでさらに細かく分岐している。ただ、高校中退者の進路分岐を理解するためには、選択肢の多様さに加えて、その変化のプロセスも考慮しなければならない。

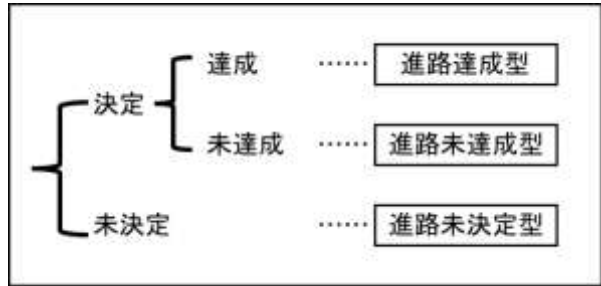
第一に、時間が経つとともにどのように歩みが変わるのかという時間軸の変化である。ここでは、「中退直後」「現在」「3年後の将来」という3時点を想定して、進路分岐のありようを考察する(図表5)。第二に、そもそも自らが目指すべき進路が決まっているかどうか、そして、その目標を実際に達成できたかどうかという目標設定の変化で

ある。これによって、進路選択のプロセスは、①そもそも目指すべき進路が決まってい
ない「進路未決定型」、②進路は決まっているが、まだ目標を達成できていない「進
路未達成型」、③進路は決まっており、その目標も達成した「進路達成型」の3類型に
整理することができる（図表6）。

図表5 時間軸の変化



図表6 目標設定の変化



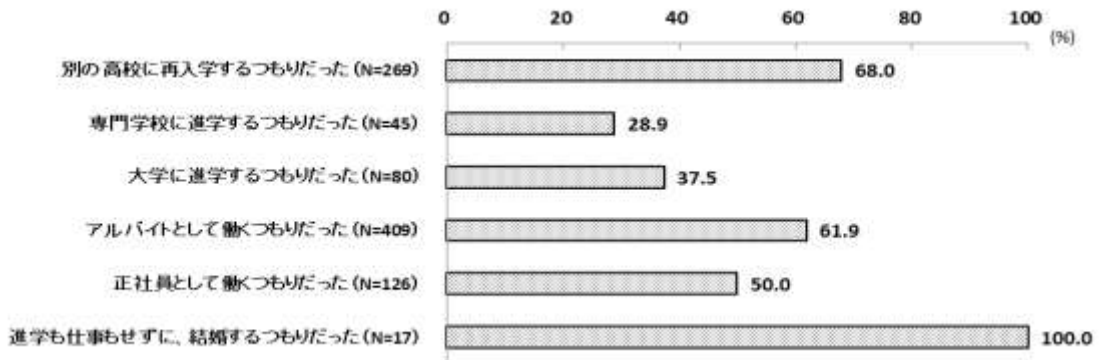
(2) 「中退直後」から「現在」までのプロセス

高校中退者は、中退直後に想定していた進路目標を、現在に至るまでどのくらい実
現したのだろうか¹。先の分析枠組みを用いれば、まず中退直後の進路として「しばら
く遊ぶつもりだった」「どうしていいかわからなかった」を挙げた者は「進路未決定型」
に該当する。そうすると、中退直後の者1,074人のうち、「進路未決定型」は11.9%に
あたり、それ以外の88.1%は何らかの目指すべき進路を想定して高校を辞めていたこ
とになる。そして目標を決めていた者のうち、現在までに希望する進路にたどり着い
た「進路達成型」が51.9%、逆にたどり着かなかった「進路未達成型」が36.2%とい
う結果になっている。

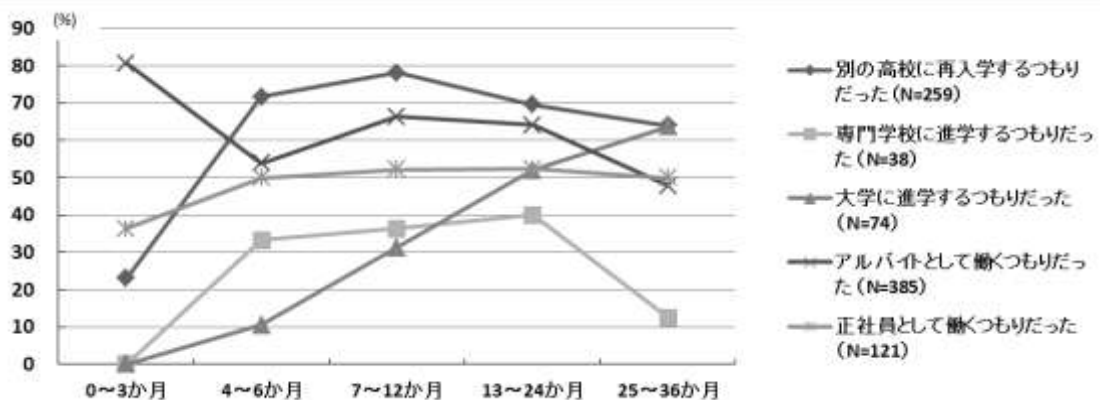
しかしながら、仮に進路が決まり、その目標を達成していたとしても、実際に達成
する可能性は目指す進路の中身によって大きく異なっていることも事実である。中退
直後の希望進路別に、その進路を無事達成した割合を示した図表7によれば、全て女
性からなる「結婚するつもりだった」者は、全員希望を叶え、いま家事や育児をして
いる。さらに比較的達成率が高いものとして、「別の高校に再入学するつもりだった」
68.0%、次に「アルバイトをして働くつもりだった」61.9%と続き、「正社員として働
くつもりだった」が50.0%となっている。最後に、「大学に進学するつもりだった」と
「専門学校に進学するつもりだった」の場合、進路達成率は相対的に低くなっている。
ただ、アルバイトへの参入障壁は正社員に比べるとそれほど高くないにも関わらず、
アルバイトと正社員の進路達成率に大きな違いがないことに注意する必要がある。

¹ 以下、煩瑣な手続きを防ぐため、進路の「その他」を選択した者を除外して分析している。

図表7 中退直後の希望進路別、進路達成率



図表8 中退後からの経過期間別、進路達成率



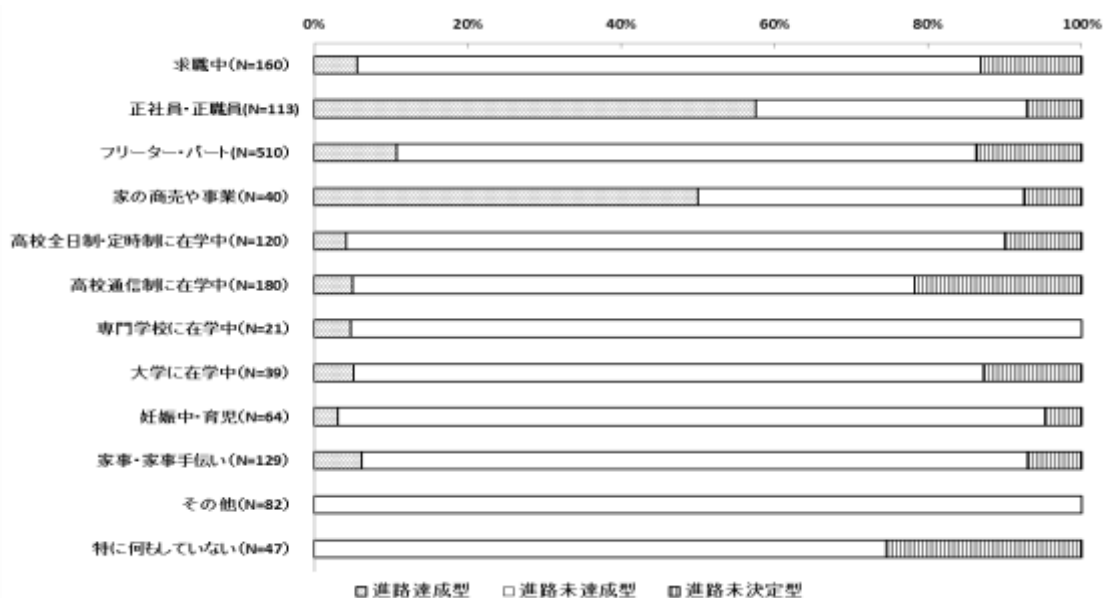
実際、進路を達成するには、中退後から現在に至る経過期間の差も大きく関係しているだろう。つまり、経過期間が長ければ長いほど、希望する地位にたどり着く割合も高くなることが予想される。図表8によれば、「高校再入学」「専門学校進学」「大学進学」の場合、おおよそ時間が経つにつれて達成率も上昇している。ただ、「高校再入学」「専門学校進学」では、学校の在学期間を越え卒業時期に達するため「25~36か月」の割合は下がっていると推測できる（「専門学校進学」は度数が少ないため、確かな傾向とはいえない）。「正社員就職」の場合、「0~3か月」のみ36.4%とやや低いものの、その後はほぼ5割で変わらない。しかしながら、「アルバイト就職」のみ他の進路と傾向が異なり、「0~3か月」で80.6%と最も高く、その後時間とともにその達成率が下がっている。このことから、仮に中退直後にアルバイトを望んでいるとしても、アルバイトは容易に達成できる短期的な目標にすぎず、むしろ他の長期的な目標に至るための通過地点、いわば試行錯誤の現れとして考えることが妥当だろう。

(3) 「現在」から「3年後の将来」へのプロセス

もちろん、今回の調査では18歳以下が全体の91.9%を占める高校中退者にとって、現在の進路が最終目標ではなく、あくまで一つのステップにすぎないことも多々あることは容易に想像がつく。例えば、アルバイトに従事している者は日々その進路を模

索しているであろうし、進学者も、学校を卒業したあと再び進路選択の問題に直面するだろう。したがって、現在から3年後の将来への移行においても、同じように「進路達成型」「進路未達成型」「進路未決定型」を想定することができよう（図表9）。

図表9 現在の活動別、進路類型



最初に、現在の活動が将来の希望進路に等しい、つまり現在既に希望進路にたどり着いている「進路達成型」が多いのは、やはり「正社員・正職員」57.5%と「家の商売や事業」50.0%に限られている。これら以外では、どの進路希望においても、最も多い割合を占めているのは「進路未達成型」であって、高校中退者の多くがまだ進路達成の途上にいることがわかる。そのほか留意すべき傾向として、「高校通信制に在学中」及び「特に何もしていない」の場合、「進路未決定型」の占める割合がそれぞれ21.7%、25.5%と比較的高く、一部の若者において進路の方向性そのものが定まっていない様子が見えてくる。

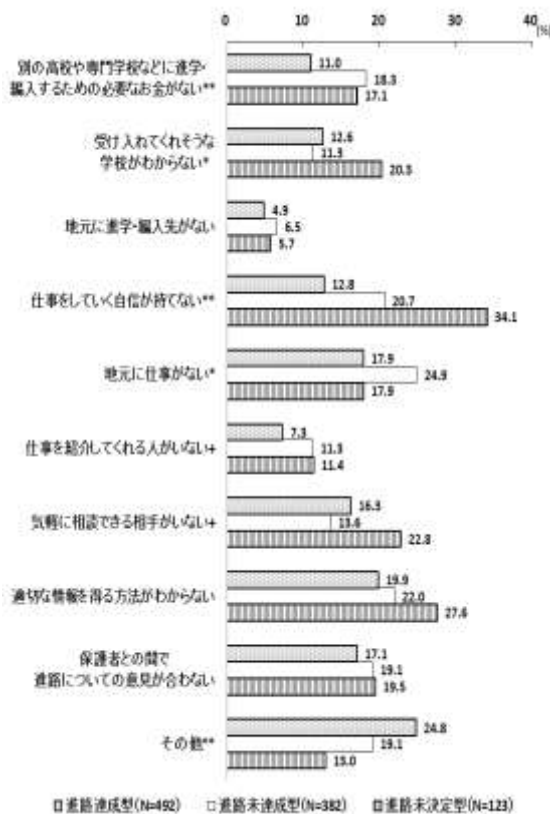
3. 進路選択のプロセスと社会的リスク

では、高校中退者にとって、中退という大きな出来事は社会的リスクとしてどのような意味を持つのだろうか。もちろん、本報告書「Ⅱ 調査結果の概要」の「7（1）」及び「7（2）」で明らかのように、進路決定における困難は目指す進路（就労・進学・その他の活動）に応じて大きく異なる。しかしながら、「中退直後」から「現在」の進路類型別に困難の有無を整理すると、別の様子が浮かび上がる（図表10）。

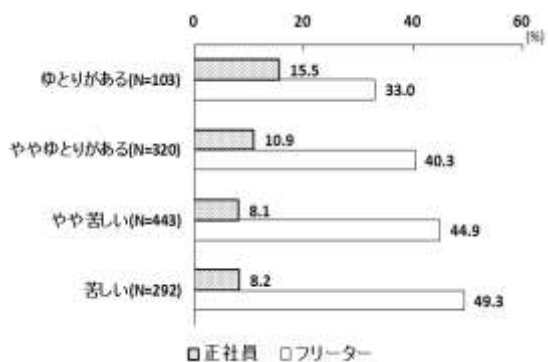
「進路未決定型」は、他の類型に比べて「仕事をしていく自信が持てない」「受け入れてくれそうな学校がわからない」「気軽に相談できる相手がいない」などが相対的に高く、

相談相手もいずに将来の目標に迷いながら、時として自信喪失に陥っていることがうかがえる。「進路達成型」の場合、「進学・編入するための必要なお金がない」や「仕事を紹介してくれる人がいない」などにおいて値が低くなっているが、「その他」の値が高いことから全く悩みと無関係なわけではないことがわかる。「進路未達成型」では、「地元の仕事がない」がやや多く、労働市場の困難に直面する割合が少し高くなるといえる。

図表 10 進路類型別、進路決定における困難 +<0.1, *<0.05, **<0.01



図表 11 暮らし向き別、正社員・フリーターの割合



高校中退者の進路選択に、家庭の経済的なゆとりはどのくらい影響を与えているのだろうか。家庭の暮らし向きと現在の活動内容の関係を見てみると、「正社員」と「フリーター」において有意差が見られた。図表 11 によれば、家庭に経済的なゆとりがあるほど、正社員になる割合が高まり、逆にゆとりがないほど、フリーターになる割合が高まっている。

4. 高校中退者の進路分岐をどのように支えるか？

以上の分析から、高校中退者の進路分岐のなかで見られる不安定さについて、留意すべき点を順番に整理してみよう。第一に、様々に枝分かれして複雑な軌跡を描く進路選択において、高校を中退しながらも、将来で目指すべき次の進路が定まらない「進路未決定層」は、一層不安定になりやすいといえよう。現在何もしていない者だけでなく、

通信制高校に通う者の一部においても、進路が決まらない状態に陥ることがある。「進路未決定層」は、相談や情報とのつながりを欠き、将来に対する不安も強くなりがちである。

第二に、パートやアルバイトに従事する「フリーター層」も、その進路のなかで不安定になりかねない。「フリーター層」の場合、確かに短期的には明確な進路となりえているものの、長期的な視点に立てば、いずれ同じような進路選択の問題に直面せざるを得ない。とりわけ、このような切迫した進路選択のありようが、家庭の経済的逼迫による選択肢の制限によるものだとすれば、「フリーター層」は潜在的な不安定さを抱えているといえよう。

第三に、部分的ではあるにせよ、上記の「進路未決定層」と「フリーター層」との重なりを考慮すれば、「通信制高校層」も不安定さを内包しがちだといえる。

第四に、高校中退者のなかでも、男性に比べて、正規雇用へ就く割合が低く、非正規雇用や家事・育児に従事する割合が高い「女性」が、将来どのようなライフコースを歩み、時としてどのような社会的リスクに直面するかは、改めて慎重に検討すべき事柄だろう。

しかしながら、高校中退者を不安定さの典型と一概に考えるのは、拙速に過ぎるかもしれない。確かに、彼ら／彼女らのおかれた状況は時として不安定な様相を帯びるように見えるが、それ以上に、その多くがはまだ進路探索の真っ最中であることも事実である。まだ10代である高校中退者の進路分岐は、自ずと進路探索という肯定的な側面と不安定さという否定的な側面の両義性を備えたものにならざるを得ない。

したがって、高校中退者に対する支援も、正社員や復学などの自明視された目標を、外部から本人が納得できないままいたずらに押し付けることは、かえって混乱を引き起こしかねない。むしろ、進路探索と不安定さが共存する「時間のかかるプロセス」そのものを保障することが重要だろう。日常生活の困難を回避しながら、ともすれば短期的な視野になりかねない将来の展望を、いかに長期的な視野へと延ばすのかが、その鍵といえる。

このような前提を踏まえた上で、進路探索としての意味が強い「フリーター層」をいかに長期的な職業的キャリアにつなげていくか、そして実際にはほぼ5割にとどまっている正社員への移行をどのように促すかが、具体的な課題となる。さらに高校中退者における進路の推移を見たとき、中退してから6か月までの期間において、その方向性が定まりがちであることを思えば、その時期の働きかけは有効な意味をもつと考えられる。